

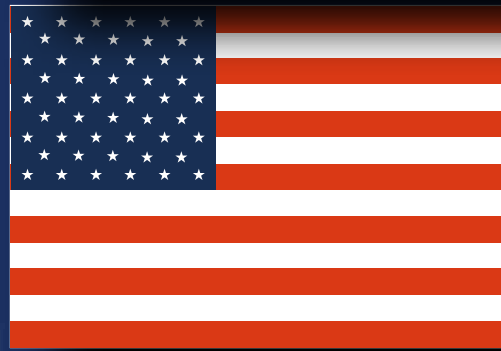
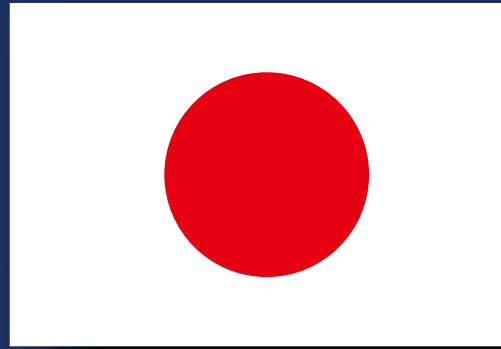
# 巡洋艦 三国史

模型で見る日米英の条約型巡洋艦

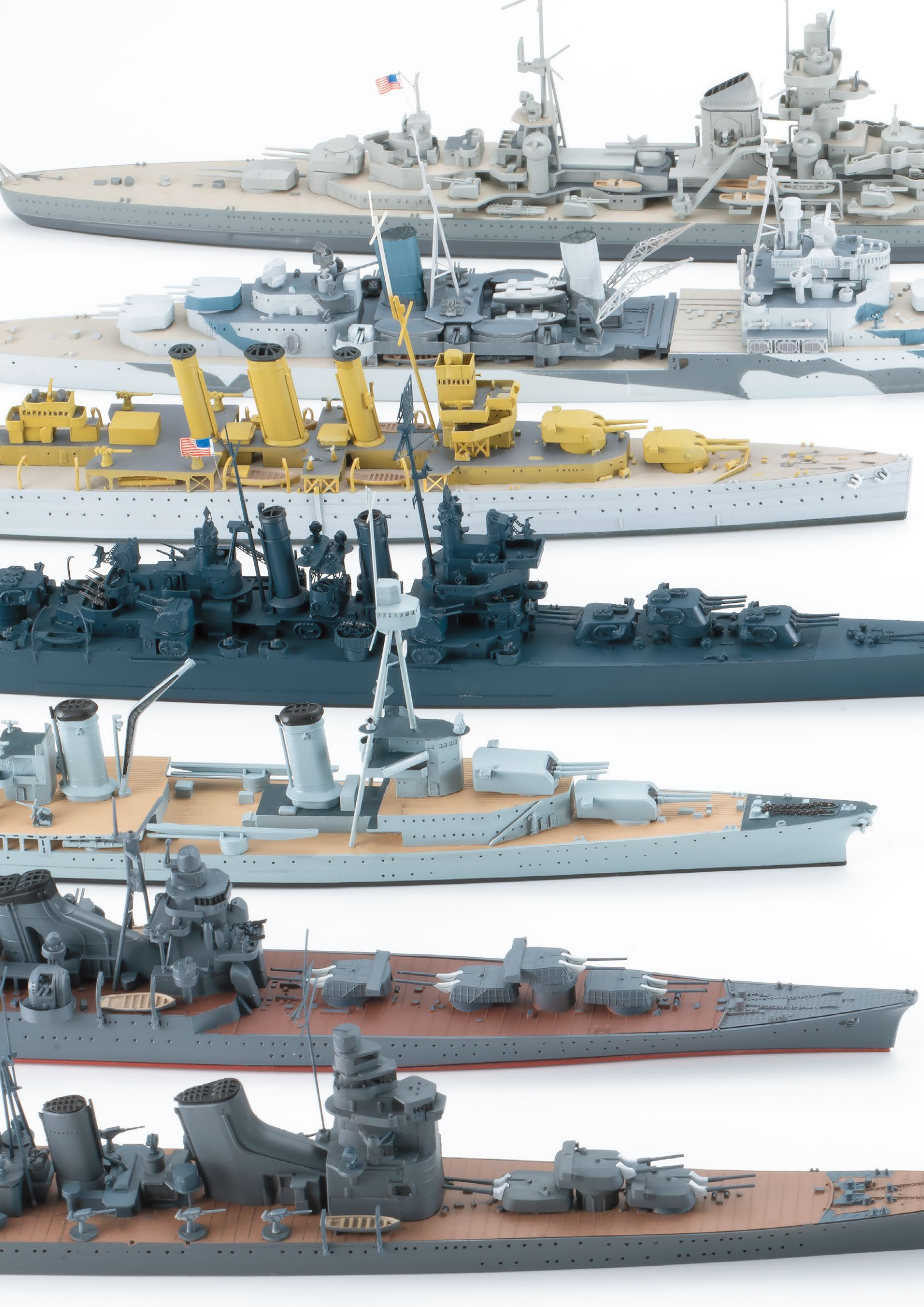
米波保之、村田博章、  
山下郁夫、畑中省吾 著

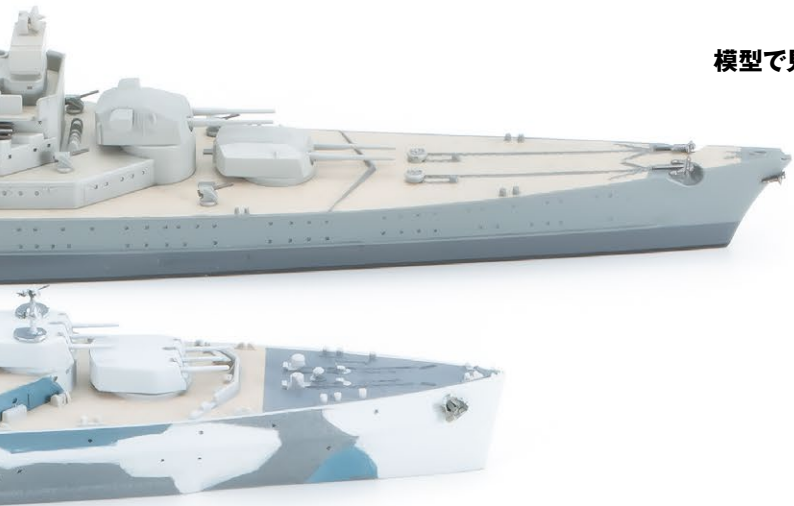
Treaty Cruisers of Three Great Navies

# 巡洋艦三國史



模型で見る日米英の条約型巡洋艦  
Treaty Cruisers of Three Great Navies  
米波保之、村田博章、山下郁夫、畑中省吾  
／著





模型で見る日米英の条約型巡洋艦  
Treaty Cruisers of Three Great Navies

# 巡洋艦三國史



C	O	N	T	E	N	T
本書を買ってくださった皆さんへ	4			<b>chapter05 戦局に応じて改装された条約型巡洋艦</b>	55	
column01 巡洋艦の速力と航続距離	6			帝国海軍重巡洋艦 摩耶1944		
<b>chapter01 条約型巡洋艦のはじまり</b>	7			アメリカ海軍重巡洋艦 インディアナポリス1944		
帝国海軍重巡洋艦 那智1928				イギリス海軍重巡洋艦 ロンドン1941		
アメリカ海軍重巡洋艦 ペンサコラ1930				<b>chapter06 ジョージV世戴冠式に集った各国の巡洋艦</b>	61	
イギリス海軍重巡洋艦 ケント1929				帝国海軍重巡洋艦 足柄1937		
特別座談会／奥深い日米英条約型巡洋艦の世界	14			ドイツ海軍装甲艦 アドミラル・グラーフ・シュペー 1937		
<b>chapter02 8インチ主砲とそのレイアウト</b>	19			オランダ海軍軽巡洋艦 ジャワ1937		
帝国海軍重巡洋艦 鳥海1932				<b>chapter07 日米英ライバル対決 スラバヤ沖海戦</b>	67	
アメリカ海軍重巡洋艦 ミネアポリス1943				帝国海軍重巡洋艦 羽黒1942		
イギリス海軍重巡洋艦 ドーセットシャー 1942				アメリカ海軍重巡洋艦 ヒューストン1942		
column02 条約型巡洋艦の主砲	25			イギリス海軍重巡洋艦 エクセター 1942		
column03 そもそも“巡洋艦”って何？	26			<b>chapter08 ワシントン軍縮条約以前の巡洋艦</b>	73	
column04 巡洋艦の分類と進化	28			帝国海軍重巡洋艦 古鷹1941		
<b>chapter03 条約型巡洋艦の艦載機搭載設備</b>	29			アメリカ海軍軽巡洋艦 マーブルヘッド1938		
帝国海軍重巡洋艦 愛宕1942				イギリス海軍重巡洋艦 ホーキンス1919		
アメリカ海軍重巡洋艦 ウィチタ1943				<b>chapter09 ロンドン軍縮条約で誕生した大型軽巡洋艦</b>	79	
イギリス海軍重巡洋艦 ヨーク1941				帝国海軍軽巡洋艦 熊野1937		
column05 条約型巡洋艦の雷装	35			アメリカ海軍軽巡洋艦 ヘレナ1943		
column06 条約型巡洋艦誕生	36			イギリス海軍軽巡洋艦 サウサンプトン1937		
column07 日本海軍条約型巡洋艦の系譜	38			<b>chapter10 条約型巡洋艦の後継者</b>	85	
column08 アメリカ海軍条約型巡洋艦の系譜	40			帝国海軍重巡洋艦 利根1941		
column09 イギリス海軍カウンティ級重巡洋艦	42			アメリカ海軍重巡洋艦 ボルティモア1944		
column10 イギリス海軍タウン／コロニー級軽巡洋艦	44			イギリス海軍軽巡洋艦 ナイジェリア1940		
国別「条約型」巡洋艦建艦年表	46			column12 条約型巡洋艦の航空兵装	91	
column11 巡洋艦に搭載された対空火器	48			column13 日本海軍条約型巡洋艦キットガイド	92	
<b>chapter04 独仏伊の1万トン級巡洋艦のデザイン</b>	49			column14 アメリカ海軍条約型巡洋艦キットガイド	94	
ドイツ海軍重巡洋艦 プリンツ・オイゲン1946				column15 イギリス海軍条約型巡洋艦キットガイド	95	
イタリア海軍重巡洋艦 ザラ1931						
フランス海軍重巡洋艦 デュケーヌ1928						



——「ネイビーヤード」で「巡洋艦三国史」の連載が始まったきっかけは、そもそも畑中さんからのご提案でした。

**畑中** 「ネイビーヤード」で初めての連載が軽巡洋艦が題材のもの（単行本『日本海軍軽巡洋艦1/700マスターモデリングガイド やっぱり軽巡が作りたい!』に収録）で、次が日本の駆逐艦が題材（単行本『駆逐艦かく戦えり 模型で再現する日米駆逐艦戦史』に収録）だったので、もう少しメジャーものにいききたい気持ちがあって、重巡がいいなって思っただけです。もうちょっと具体的にこの連載を発想したきっかけは「ネイビーヤード」31号の特集記事、「模型で見る、模型で知る『巡洋艦』ってなんだろう?」の記事なんです。それまで私は日本艦を中心に見ていましたが、外国の巡洋艦と比較したような記事がすごく新鮮だったということがあって、これは面白いなと思いました。日米英で競って造られた条約型巡洋艦の比較が面白かった。それで思いついたのが、『世界の艦船』の1960年7月から翌年の10月まで連載された「条約型巡洋艦の研究」です。これは、酒井三千生さんという方が、条約型巡洋艦とはどういったものだったのかについて詳しく書かれた記事でした。条約型巡洋艦というのは、海軍縮約条約の制限のもと、同じようなスペックで各国が工夫を凝らして建造したものでしたが、これらを模型で並べて見ると面白いんじゃないかと思って、米波さんに相談したのがきっかけでした。

**米波** 時期的にも、青島文化教材社がイギリス

海軍の条約型巡洋艦の新キットを次々としていたころでしたね。それらを紹介する機会があればいいなと思っていましたよ。

——アメリカ艦は、「ボルティモア」や「クリーブランド」などのキットが以前よりビートルードから発売されていたと思いますが、あのころまでイギリスの巡洋艦のキットってほとんどなかったですよ。青島文化教材社のおかげで重巡洋艦のキットが一斉に揃いました。日本の艦船模型ファンは日本艦しかキットがないから外国艦を知りようがない時代がありました。「日本艦もいいけど、日本艦と比べて他国の艦はどうなんだろう」ということが視覚的に見られる企画って面白いなということで、この連載を始めることになりました。

**畑中** 各国が同じスペックの中で設計するという「1万トン級重巡コンペティション」は、あの時代特有のもので非常にユニークです。

——制限がない状態だと、国力があるほうが無制限に大きく強力な武装の巡洋艦を建造することができてしまいますが、この時代は違ったんですね。隻数も武装もサイズも決まっていて、その中で各国の工夫が面白いです。

**畑中** 同じようなスペックなのに、違う解釈の仕方がされているのが見て取れるのも興味深い。

——企画案は畑中さんと米波さんから提案いただいたのですが、山下さんにも参加していただいております。自分も日本艦を担当することになりました。

**山下** そうですね。自分は『世界の艦船』のバックナンバーを持っていたので、実はお話を聞

たときにどの年代で作るのが結構悩んだこともありました。それから、模型店に行くと1944年、45年を再現したキットは多いんだけど、それを開戦時に戻すというようなものもありました。連載中に、初めて1万トン級の巡洋艦の大きさを実感したことがあったのも面白かったですね。自分が担当したイギリス海軍の「エクセター」という艦があったんですけど、はじめに「8インチ砲が6門だから、日本の古鷹型クラスのコンパクトな巡洋艦だ」と思ったら、堂々とした船だったので驚いたんですね。それまで頭の中で描いていた巡洋艦の大きさが、実際に作ってみると違ったりするのは面白かったですね。

——山下さんには日本艦を中心に担当していただきましたけれど、途中でイギリス艦やフランス艦なども製作したので大変だったのでは？

**山下** フランスの「デュケーヌ」はレジンキャストキットでしたが、これには苦労しました。写真も資料も少ないし、どうしたものかと思いつながら作り直したよ。

——村田さんは、最初から最後までほぼアメリカ艦の担当でした。アメリカ艦がお休みのときにドイツ艦を製作したくらいでしょうか。アメリカ艦はいかがでしたか？

**村田** インジェクションプラスチックキットがないものが多いというのがいちばんの悩みでした。日本海軍と直接戦った国なので、読者の方

## 特別座談会 / もっと巡洋艦の魅力に気づいてほしい! 奥深い日米英条約型巡洋艦の世界

山下郁夫 / 連載ではおもに日本海軍の巡洋艦の製作を担当。青島文化教材社の艦船模型の設計者で退職後、艦船模型メーカー、ヤマシタホビーを立ち上げる。好きな巡洋艦は日本海軍の高雄型重巡洋艦

米波保之 / 今回の連載の企画立案者のひとり。連載ではおもにイギリス海軍の巡洋艦製作を担当。「ネイビーヤード」誌では創刊時よりマイナー艦船を紹介する「ジミ艦」という連載を続けている

村田博章 / 連載ではおもにアメリカ海軍の巡洋艦製作を担当。「ネイビーヤード」ではアメリカ海軍の空母を紹介する「US Aircraft Carrier 1 to 8」などの連載を担当。アメリカ海軍艦の魅力の日々啓蒙している

畑中省吾 / 今回の連載の企画立案者のひとり。連載ではおもに解説記事の執筆を担当する。「ネイビーヤード」では日本海軍の平型甲板空母などを紹介する「日本航空母艦」などを連載。日本海軍ファン



になんとか紹介したいという気持ちは以前からあったんですが、どうすればいいのかと思っていました。今回の連載にお誘いいただき、アメリカ艦の魅力を伝えられるということで意気込んで参加しました。最初の打ち合わせで連載の担当艦を決めたのですが、手元にあるレジンキャストキットを駆使すれば、ほぼ全部紹介できそうだなという目算はありました。アメリカ艦って日本ではあまり人気がありませんが、それはアメリカ艦の魅力が知られていないからであって、模型を見せることができれば人気が出るんじゃないか、ってずっと思っていたんです。それが連載の個人的な目標でした。

——国内だと模型メーカー側もアメリカ巡洋艦がどんなものかわからない、という側面もありますよね。村田さんがアメリカ艦を担当して、「アメリカ艦はこんな姿だったよ」と見せられたことで、アメリカ艦もいいなと思う模型メーカーが出てきて、そこからキット化の方向に向かうようなことがあればいいですね。

**村田** 連載で見開きページで三隻並べていますよね。あれは良かったですね。日米英三国の競い合いみたいなのが感じられて。

——連載の途中で発売されていないなかったイギリスの軽巡洋艦のキットが何隻か発売されました。トランベッターの「ベルファスト」とカフライホークの「エイジャックス」など。アメリカ艦もそういう動きがあったらよかったんですけど……。大戦後期の「クリーブランド」などはキット化されましたが、戦前のものはまだキッ

ト化されていない艦もたくさんありますね。

**村田** 日本海軍のライバルであるノーザンブトン級重巡洋艦のキットが一番欲しいです。——いいですね。ブルックリン級やノーザンブトン級が一番激しく戦ったタイプですので、そのあたりのキットがないのは日本艦ファンとしても寂しいですね。この『巡洋艦三国史』の連載は3年半ぐらい続きましたが、その間はイギリスの巡洋艦のキットがいくつか発売されました。巡洋艦を1隻全部フルスクラッチビルドするのは大変ですけど、たとえキットが発売されていなくても武装パーツなんかを使い回せば製作も大分楽になります。

**米波** でも、結局手を加えたりしていますけどね。だから、キットが製品化されることに作例も進化していくという(笑)。アメリカ艦だと、これからセントルイス級の「ヘレナ」がキット化されるんじゃないか？

**村田** 「ヘレナ」は2024年秋製品化予定です。**畑中** ブルックリン級とセントルイス級はキットになったらいいなってずっと思っていたんですよ。

——ブルックリン級、セントルイス級は日本の最上型に相当するタイプですね。あの艦首側のピラミッド型主砲レイアウトは日本の影響でしょうか？

**米波** そうみたいです。計画では砲塔4基だったけれど、最上型の情報を得て1基追加したんです。5砲塔なのはこのクラスだけですね。妙高型、高雄型のあたりの主砲配置をアメリカが

取り入れたんでしょう。

**村田** 無理矢理突っ込んだんでしょうね。——そのあとのクリーブランド級などでは砲塔の数を減らしています。**米波** ブルックリン級をキット化するなら「ウィチタ」もラインナップしてほしいですね。——「ウィチタ」はセントルイス級と船体は同じなんじゃないか？

**米波** ほぼ同じです。**畑中** 「ウィチタ」はカッコいいですね。——「ウィチタ」は連載2回目に掲載しています。フルスクラッチビルドでしたね。

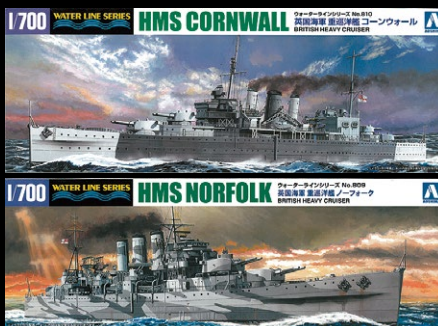
**村田** クリーブランドの船体を使ったんですけど、艦尾形状が全然違うんです。——アメリカ艦の艦尾はトランサムスターンのデザインですね。

**村田** 抵抗が一番少ないんですね、これが。——このあたりのクラスからトランサムスターンになっています。このデザインだと艦尾にカタパルトも格納庫もクレーンも置けますね。

**畑中** 有機的な配置ですね。——艦尾が尖っている方が速いイメージもあります。

**畑中** 私は今でもそういうイメージですけど。やってみて不都合がないとわかったから、こういうデザインになっていったんですかね。

——この連載で3国の巡洋艦を並べてみることで、デザインの変遷がよくわかりました。日本艦は、わりと艦首の部分に余裕があるように感じますね。他国の艦は、艦首から第一砲塔まで



『巡洋艦三国史』の連載のきっかけのひとつとなった青島文化教材社から2018年ごろより発売されたイギリス海軍重巡洋艦シリーズ。このキットが発売されるまでイギリス海軍の重巡洋艦キットはレジンキャストキットくらいしかなく初心者には手が出しづらいものだった。青島文化教材社のイギリス海軍重巡洋艦は「エクセター」からスタートし、カウンティ級の「コーンウォール」「ドセットシャー」「ケント」「ノーフォーク」が発売されている

## セントルイス級軽巡洋艦「ヘレナ」

## 重巡洋艦ウィチタ



連載第3回に登場した重巡洋艦「ウィチタ」と第9回に登場したセントルイス級軽巡洋艦「ヘレナ」。「ウィチタ」はフルスクラッチビルド、「ヘレナ」はニコモデルのレジンキャストキットである。「ウィチタ」はもともとニューオリンズ級重巡洋艦の8番艦として計画されていたがセントルイス級軽巡洋艦の船体設計が優秀だったため、その船体を流用して建造された。模型で比較すると船体形状が似ていることがよくわかる

# chapter 02 8インチ主砲とそのレイアウト

条約型巡洋艦が登場した時代、軍艦の戦いの王道は砲戦だった。日米英各国が知恵を絞りぬいた主兵器の配置は、それぞれの事情や理想を反映して全く違ったものとなった。三国の主砲配置を模型で比較する

イギリス海軍重巡洋艦 ドーセットシャー  
青島文化教材社 1/700  
インジェクションプラスチックキット  
製作・文/山下郁夫  
Royal Navy Heavy cruiser Dorsetshire.  
Aoshima 1/700 Injection-plastic kit.  
Modeled and described by  
Ikuo YAMASHITA.

アメリカ海軍重巡洋艦  
ミネアポリス  
コンブリック 1/700  
レジンキャストキット  
製作・文/村田博章  
United States Navy Heavy cruiser  
Minneapolis.  
Combrig 1/700 Resin cast kit.  
Modeled and described by  
Hiroaki MURATA.

ドーセットシャー



ミネアポリス



鳥海



帝国海軍重巡洋艦 鳥海  
フジミ 1/700  
インジェクションプラスチックキット  
製作・文/米波保之  
Imperial Japanese Navy Heavy cruiser Chokai.  
Fujimi 1/700 Injection-plastic kit.  
Modeled and described by Yasuyuki YONENAMI.

## 命中精度や如何に？ 各国で異なる主砲塔の配置

条約型巡洋艦が設計された時代、言うまでもなく最強の兵器は砲兵装であった。陸上砲の射撃の場合は、陣地に複数の砲を配置しても、基本的には1門ずつが独立して照準・発射を行なうが、艦砲では主砲、副砲といった搭載砲の種類ごとに、複数の砲を一つのシステムとして運用する。砲の射撃では、同一の目標に同一の発砲諸元で発射された砲弾も、様々な要因による誤差のため1弾ごと弾道が微妙に異なり、弾着点のばらつきとなって現れる。これを数値的な範囲として示すものが「散布界」で、これが狭いほど命中率が高くなるとされる。最大3万mに近い重巡洋艦の砲戦距離では誤差も大きくなり、目標に命中させるこ

とは非常に難しいため、複数門を同一の射撃計算値に基づいて多数発砲し、その中から命中弾が出ることを期待することになる。ワシントン軍縮条約では、巡洋艦に搭載できる砲の口径を8インチ(20.3cm)以下とされていたが、この範囲内であれば各砲の構造や配置などは自由なので、砲の必要数や効率的な配置で各国が知恵を絞ることになった。

イギリス海軍では、巡洋艦は植民地とのシーレーン防衛という他国と異なる任務を担うことから、長期の航海に対応する居住性との両立のため攻撃力は日米に比べて妥協し、連装4基8門を艦首尾に背負い式に2基ずつ配置している。保有枠内で隻数を稼ぐため艦型を縮小したヨーク級を除き、一貫してこの配置となっている。

日本海軍では、主砲10門を搭載するため、連装砲塔5基とし、艦首側に3基をピラミッド型に

配置。艦尾側は背負い式に2基とした。妙高型で確立したこの配置を第二世代の高雄型でも踏襲している。連装砲塔は青葉型が嚆矢となったが、一砲塔から斉射された2発の砲弾の相互干渉で散布界が広がることが判明し、発射のタイミングを0.3秒ほどずらす遅延装置が開発された。

アメリカ海軍では、最初の条約型であるベンサコラ級から三連装砲を採り入れ、連装砲塔との混載で主砲は10門搭載したが、次級のノーザンブトン級以降は防御力とのバランスを考慮し、連装砲塔を廃して三連装砲塔3基、9門に減じ、艦首方向に2基を背負い式に、艦尾方向に1基を配置、後続のクラスもこれを踏襲した。条約型第三世代のポर्टランド級までは復原性能の不足で主砲斉射時の散布界が増大する欠点があったが第四世代のニューオーリンズ級では船体の改良で復原性能は改善されている。

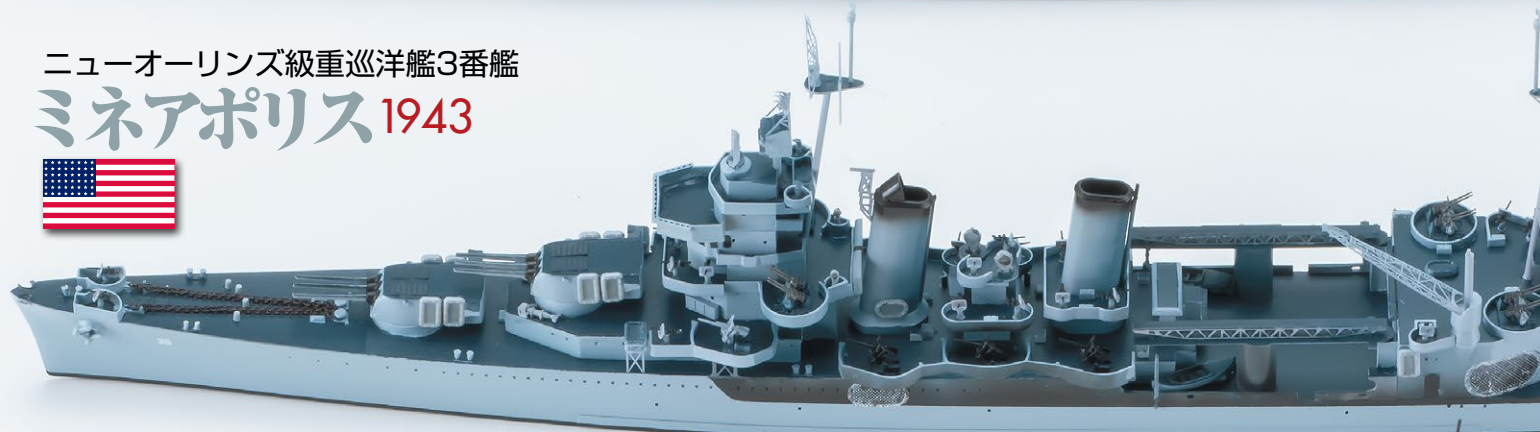
ノーフォーク級重巡洋艦2番艦

# ドーセットシャー 1942



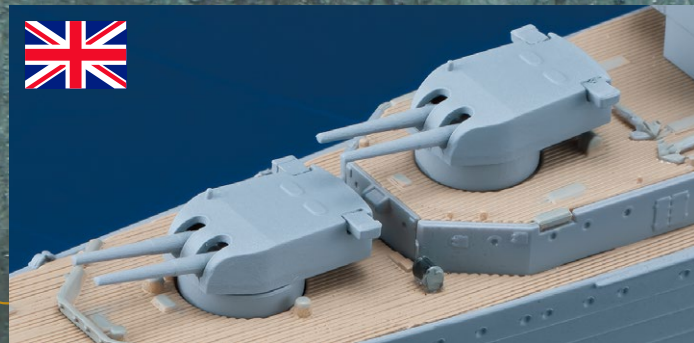
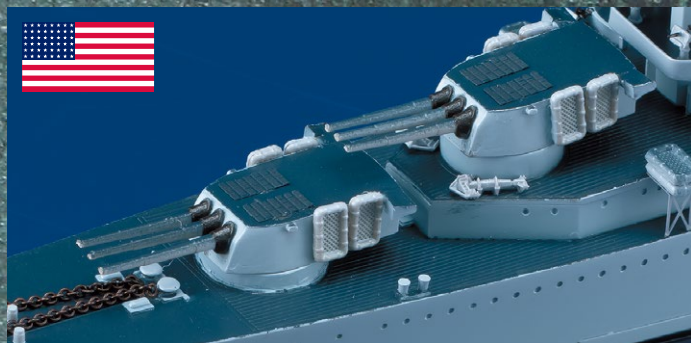
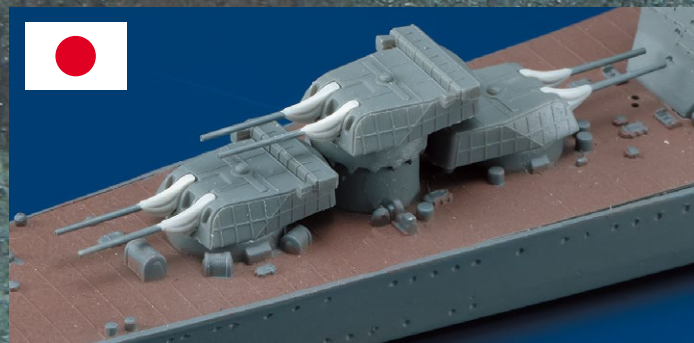
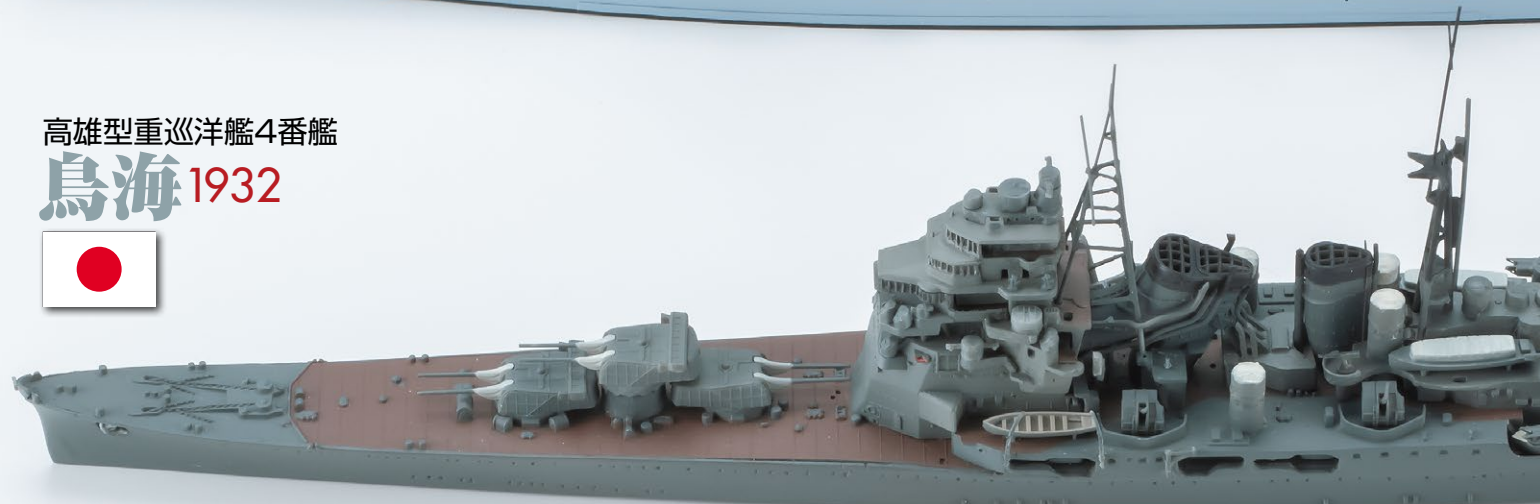
ニューオーリンズ級重巡洋艦3番艦

# ミネアポリス 1943



高雄型重巡洋艦4番艦

# 鳥海 1932



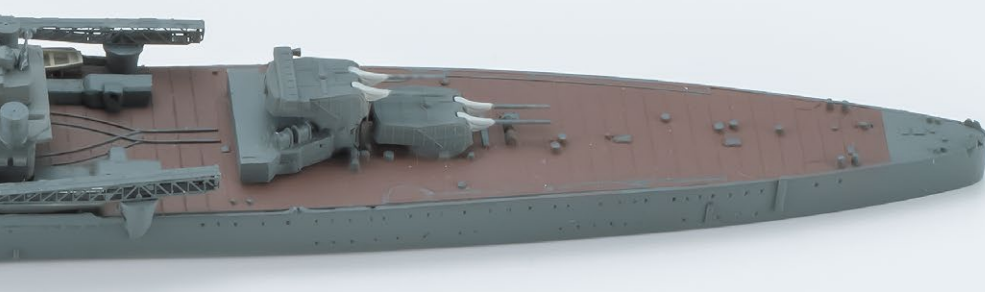
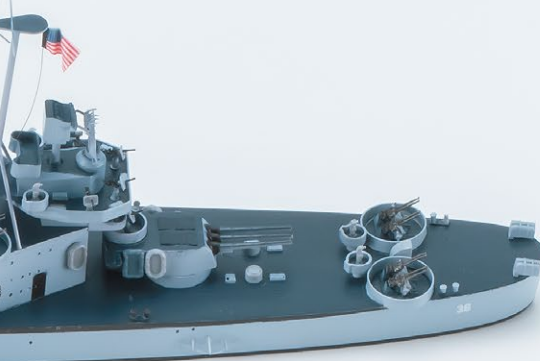
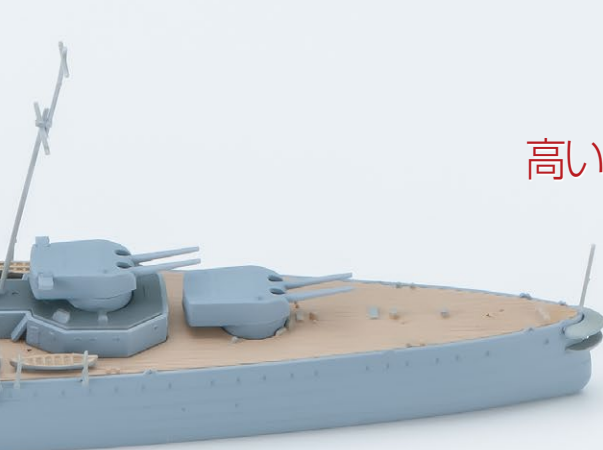
**充実した防禦の米国巡、軽防禦の日本と英国巡**

主砲口径はいずれも8インチ (20.32cm) で同じである。日本の高雄型「鳥海」は砲身長が50口径、3隻の中で最も主砲門数が多い連装砲塔5基の10門。米国のニューオーリンズ級「ミネアポリス」はもっとも砲身長が長い55口径で3連装砲塔3基の9門。英国のノーフォーク級「ドーセットシャー」は日本と同じ砲身長の50口径で、連装4基の8門である。

砲塔防禦は米国ニューオーリンズ級「ミネアポリス」がもっとも充実していて前面165mm、側面51mm、天蓋38mmである。日本の高雄型「鳥海」の砲塔は弾片防禦程度の25mm鋼板、英国のノーフォーク級「ドーセットシャー」も日本同様の25mmの軽防禦だった。実際に砲塔と呼べるのは米国巡だけである。

最大仰角についても、米国のニューオーリンズ級「ミネアポリス」は45度の平射砲としていたのに対し日英は違った。英国はセント級・ロンドン級が75度と高角兼用にしようとして失敗し、ノーフォーク級「ドーセットシャー」では50度とした。日本もこれに似て、高雄型「鳥海」は「高雄」「菱石」ともども70度の高角兼用をねらってみたがうまくゆかず、「摩耶」では55度に変更したことは英国と軌を一にしている。





# カウンティシリーズの3番目 高い航洋性をもち、居住性のよさと長い航続距離が自慢

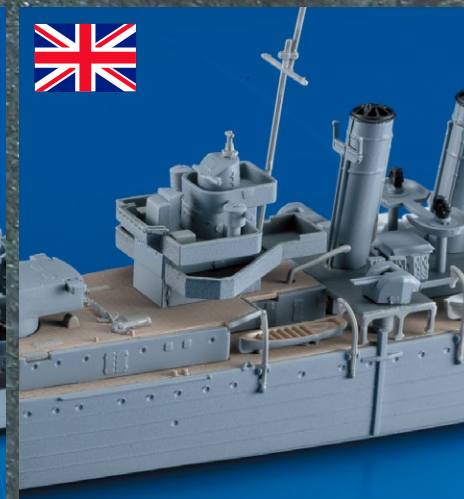
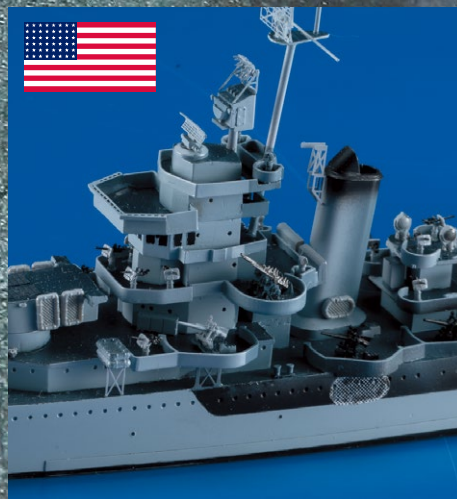
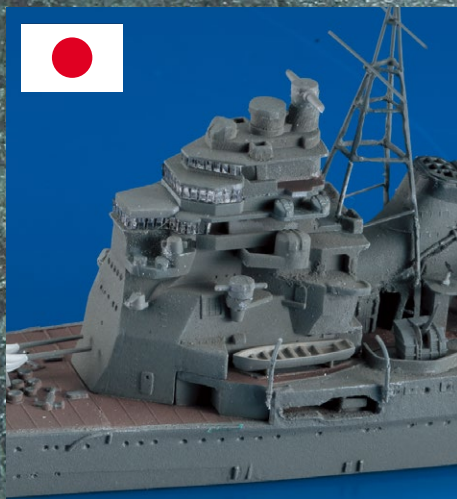
英国条約型巡洋艦カウンティシリーズの3番目のスタイルになる。2番目のロンドン級と同じウィリアム卿の設計なので、ほとんど同型だが、魚雷発射管と高角砲の配置が異なるほか、主砲塔を最大仰角50度のMK IIとし軽量化を図った（実際はMk Iより重くなった）。高い乾舷、後傾した3本煙突、小さな艦橋はカウンティ級共通の特徴だ。艦尾には大時代なスターンウォークを備え、平甲板型の船体、レークドステム、クルーザースターン、高いマストと併せて優美な軍艦といった印象を与える。「ノーフォーク級」は4隻を建造する予定で、準備工事もされ艦名も決まっていたが、ロンドン軍縮条約による制限で英国の建造枠に余裕がなくなったため「サリー」「ノーサンバランド」の2隻は放棄された。「ドーセットシャー」は1942年4月、インド洋でケント級の「コーンウォール」ともども日本の艦上爆撃機隊によって撃沈された。対空の高角砲は新造時の10.2cm単装砲から同連装砲4基に換装されていた。

# 条約型への米国の解答 攻守のバランスを突きつめた設計

ベンサコラ級に始まった米国条約型巡洋艦の決定版ともいえるのがニューオーリンズ級である。ポートランド級まで続いたクリッパー型艦首をやめてシングルカーブドステムとした。またそれまでの鐘機交互配置をやめ、船首楼を延ばして煙突の後ろにカタバルトと飛行機格納庫を配置した。魚雷装備はもたない。米条約巡の特徴である3連装主砲は本級から各個に俯仰可能な砲塔を採用した。前3級が復原性に問題を抱えていたことから、本級ではシルエットを低くして復原性を確保、前・後橋とも単橋とした。このように一気にデザインを更新したばかりでなく、舷側、砲塔などに重防禦を施し攻守のバランスを考えた設計となっている。ところが、開戦早々ニューオーリンズ級は災難に見舞われた。ソロモンを巡る海戦で3隻が沈没、3隻が大損傷をこうむったのである。「ミネアポリス」は艦首を突い、本国へもどって修理を受けることとなった。修理と近代化改装により顔つきが一変した。

# 巡洋艦一の巨顔を誇る高雄型 旗艦設備を備えながら通信能力に問題あり？

「鳥海」の属する高雄型は妙高型の発展形だが、じつに複雑な姿の軍艦である。艦橋は何階建てなのかよくわからないほどだ。しかし見慣れると恰好よく感じられる。巨大な艦橋に銃火器は一つもついておらず光学兵器で占められている。旧海軍では見張能力を極限まで研ぎ澄ませて砲撃戦に勝利する訓練が行なわれていた。電波兵器に遅れをとったのもむべなるかな、である。連装5基の主砲には最大仰角70度の新型砲塔を採用した。対空射撃もできるとの触れこみだが、固定角度装填式であることや対空弾の信管調定の難しさなどもあって発射速度は遅かった。航空艦装や雷装などなんでも盛りこんだせいで居住性は悪化。高雄型のうち「愛宕」と「鳥海」は旗艦設備を備えていた。しかし「鳥海」は近代化改装を見送ったことから前・後橋が接近したままで開戦を迎え、旗艦としての通信能力に問題があったといわれる。たしかにこうして3隻を並べて比べると、「鳥海」のマスト間は極端に短い。



**標準的な米英に対し、  
あまりに特殊な  
形状を持つ日本重巡**

「鳥海」が建造された頃は光学兵器などの技術が大きく発展した時期で、用兵者から多くの要望が寄せられた。それら意見をくみ取り有機的に造形した艦橋といわれる。10層も積み上げた構造は複雑で、訓練にはまじか実戦には向かないなど批判されたが、堂々とした佇まいを見ると、日本の造船官がこの造

形にこめた想いはひしひしと伝わってくるのではないだろうか。「ミネアポリス」をはじめとする米艦艇は、充実した工業力を背景に、改装とはいいながら新造に匹敵する徹底した造り変えをした。新造時の大きな四角いガラス窓が並んだ艦橋はどこに行ったのか。「え？

大きな角窓なら並んでいるではないか」とおっしゃるか。これは欺瞞塗装なのである。大きな重巡洋艦が小さな駆逐艦に見えるようにペンキで描いた窓で、実際は小さな丸窓が数個あるにすぎない。「ドーセットシャー」の艦橋は新造時から大きな変化はない。そしてこの姿でインド洋に沈んだ。

# 条約型巡洋艦の主砲

条約型巡洋艦に搭載された8インチ砲と6インチ砲

条約型巡洋艦のうち、ワシントン条約で規定されたのは口径8インチ以下の主砲を搭載する巡洋艦で“A-class cruisers”と呼ばれた。一般に重巡洋艦と呼称する。またロンドン条約で規定されたのが口径6.1インチ以下の主砲を搭載する巡洋艦で“B-class cruisers”、一般に軽巡洋艦と呼称する。ここでは三国の巡洋艦が搭載する主砲を見ていこう 解説/畑中省吾

## ■日本

日本が条約に沿ってまず建造した重巡洋艦は妙高型である。妙高型の主砲は前級である古鷹・青葉型の主砲口径が正8インチ（20.3cm）ではなく7.9インチ（20.0cm）だったのを引き継いで、新造時は口径20.0cmだった。この主砲を50口径三年式I号20センチ砲という。当初、10門の主砲で斉射を行なうと着弾の散布界が広く、命中率の低さが問題となった。船体の強度を調べるなど原因の究明に専心した結果、砲弾同士が飛行中に干渉を起こして弾道に影響し合うことが理由と判明。発砲のタイミングをずらす九八式発砲遅延装置が開発されて問題は解決した。

妙高型が正8インチである50口径三年式II号20センチ砲に換装したのは1939～41年完成の第2次改装のときだった。妙高型の主砲塔は連装でD型砲塔と呼ばれ、厚さ25mmのNVNC鋼を使用した軽防御、というより単にスプリンター防御程度の薄い構造とされた。仰角は40度～5度。砲弾は弾庫から人力で揚弾筒まで運ばれ、揚弾機で砲塔内に上げると装填盤に載せ、装填棒で薬室に押しこむ機構だった。迫上げ式という。第2次改装でこの機構を改良し、揚弾方式を釣瓶式として、火薬庫から揚げる装薬を交互に引き上げる方式とした。これにより、もし砲塔に被弾しても火薬庫への引火の危険を局限できるようにした。また、九一式徹甲弾を搭載できるように改良された。

高雄型では、当初から正8インチの三年式II号20センチ砲が採用され、これを連装のE型砲塔に収めた。E型砲塔もD型砲塔と同様に砲室壁に25mmNVNC鋼が使われた。仰角は70度～5度で対空射撃も可能な機構を備え、揚弾筒は対空弾用を追加したため、砲弾の装填が5度の固定装填であることや、高角射撃指揮装置がないなど、いわゆる両用砲の機能はなかった。

最上型に搭載された砲は60口径三年式15.5センチ砲と称し、口径が6.1インチ（15.5cm）で、ロンドン条約に定められた最大口径だった。しかも砲身が60口径と長く、日本海軍初めての3連装砲塔に収めた。仰角を55度～10度とし、対空射撃も可能とした。発射速度は毎分5発。1艦で15門を備え、最大射距離も2万7400mと長く、列強にとって最上型は脅威と映ったことだろう。

## ■英国

英国の条約型重巡は第1型のケント級から第4型のヨーク級まで、主砲は50口径MkVIII 8インチ砲である。主砲を収める砲塔は、ケント級は連装のMkI型4基で、最大仰角は70度、発射速度は毎分4発とされる。

対空射撃も可能とするため装填角を10度と70度の2通りの固定装填としたが、実際には水圧ポンプの圧力不足などの理由で対空射撃はほとんど実用とならなかった。第2型のロンドン級では砲塔を小改造したMkINとした。俯仰機構の改良と弾庫の拡大などが実施されて呼称が変わったが、外観はほとんど変わらない。第3型のノーフォーク級はロンドン級と同じ設計者の設計のため、艦容は類似しているが、主砲塔は新設計のMkIIとなった。MkIは190トンもあり兵装重量が過大であるとの指摘がなされたので、MkIIでは最大仰角を50度に抑え、また給弾方式を改良したが、最終的にはMkIより重い220トンになってしまった。なお、ノーフォーク級は弾庫の防御範囲の拡張も実施している。第4型のヨーク級は、カウティ級の砲塔4基搭載から1基減じて3基搭載とした。砲塔形式は最大仰角50度のMkIIである。

英国の主砲塔の揚弾機構は、揚弾を迫上げ式、揚弾筒を釣瓶式としている。日本の高雄型の方式は英国の揚弾機構の資料を見て、同方式を採用したものと考えられている。

英国はA-classからB-class、つまりロンドン条約で規定された口径6.1インチ以下の主砲を搭載する軽巡洋艦へシフトしていった。50口径MkXXIII 6インチ砲の連装をリアンダー級に、3連装をサザンブトン級（タウン級）に搭載した。

## ■米国

米国の条約型重巡の第1型であるペンサコラ級の55口径Mk9 8インチ砲は、連装砲塔が2基と3連装砲塔のMk14が2基の計10門を搭載した。砲塔には37mmの装甲が施され、最大仰角は45度である。また連装・3連装とも砲鞍が一つに固定されているので、砲身は同時俯仰となる。第2型のノーザンブトン級と第3型のポートランド級はペンサコラ級と同じ3連装砲塔Mk14を3基搭載した9門艦とした。ただし、それぞれの砲塔形状は細かい箇所異なるようだ。第4型のニューオーリンズ級と第5型の「ウィチタ」、および条約明け建造のポルチモア級では、搭載する砲は同じMk9だが砲塔が新型のMk12となり、ニューオーリンズ級後期建造の2隻以降は3本の砲身を別々に俯仰可能となった。なお、装填は5度固定式だった。最終型のデ・モワン級では半自動装填機構を備えたMk16砲塔となり、発射速度が格段に向上した。

軽巡ブルックリン級（セントルイス級を含む）に搭載された6インチ（15.2cm）砲は47口径のMk16で、3連装砲塔5基15門とした。砲配置は日本の重巡を参考にしたとされる。



三年式II号20cm砲



三年式15.5cm砲



8インチMk9



6インチMk16



8インチMkVIII



6インチMkXXIII

		主砲直径	口径	弾丸重量	初速	最大射程	登場年	主な搭載艦
日本	三年式（I号）20cm砲	20.0cm	50口径	110kg	870m/秒	2万8900m	1926年	古鷹型、青葉型、妙高型※1
	三年式II号20cm砲	20.3cm	50口径	125.9kg	835m/秒	2万8900m	1932年	高雄型、最上型※2、利根型
	三年式15.5cm砲	15.5cm	60口径	55.9kg	920m/秒	2万7400m	1935年	最上型、大淀型
アメリカ	8インチMk9～12	20.3cm	55口径	152kg	760m/秒	2万7480m	1921年～	ペンサコラ級、ノーザンブトン級、ポートランド級、ニューオーリンズ級、ウィチタ、ポルチモア級
	6インチMk16	15.2cm	47口径	59kg	760m/秒	1万8288m	1932年	ブルックリン級、クリーブランド級
イギリス	8インチMkVIII	20.3cm	50口径	116.1kg	855m/秒	2万8030m	1928年	ケント級、ロンドン級、ノーフォーク級、ヨーク、エクセター
	6インチMkXXIII	15.2cm	50口径	50.8kg	841m/秒	2万3300m	1933年～	リアンダー級、パース級、アリシューザ級、サウサンブトン級、クロスター級、エディンバラ級、フィジー級他

※1……古鷹型、青葉型、妙高型はのちの改装により三年式II号20センチ砲（主砲直径20.3cmに換装されている）

※2……新造時の最上型は三年式15.5センチ砲（三連装）を搭載していた

# アメリカ海軍条約型巡洋艦の系譜

ペンサコラ級からボルチモア級まで32隻もの重巡洋艦の建造に成功

アメリカ海軍では大建艦計画である「3年計画」ではオマハ級が10隻建造された。その後ワシントン条約締結で生まれた条約型重巡洋艦の建造がスタートする。重巡洋艦という新しい枠組みの中で5タイプが発達を遂げた。後のロンドン条約で新たに軽巡洋艦が計画され、完成された条約明けの巡洋艦へ繋がって行くのである

解説/村田博章

## ペンサコラ級 1929年～ (同型艦2隻)

ペンサコラ級はアメリカ条約型巡洋艦の最初のグループ。主砲は制限一杯の8インチ砲を10門搭載し、5インチ高角砲と発射管を備えた重武装艦であった。排水量は9千トンと制限より小さく、低いシルエットのフラッシュデッカーが採用された。2隻は近代改装を繰り返し大戦末期には新鋭艦と遜色ない戦闘能力を有していた

主砲は8インチ連装、3連装を背負式に搭載して制限の10門を達成した。両煙突間は機関のシフト配置で生じた広い空間を航空機運用のスペースに用いた

当初塔型の密閉型羅針艦橋に極めて高い三脚楼を持っていたが、大戦末期には一部露天となった艦橋へ上部をカットした低い三脚楼へ改装された

## ポートランド級 1932年～ (同型艦2隻)

ノーザンブトン級の拡大改良型として建造された第3グループ。アメリカ条約型として排水量が初めて1万トンを超えた。艦型はノーザンブトン級と酷似しており艦橋などの構造物は大型化しているがマスト等は低く抑えられた。2番艦は旗艦設備設置の為長船首楼となっている。このクラスから発射管は装備されていない

船体は高い乾舷の船首楼タイプで緩やかなタンブルホームとなっている。艦首ベルマウス付近が盛り上がっているのはこのクラスまでの特徴

主砲はペンサコラ級のものと同じ3連装を3基9門搭載へ変更し、この搭載スタイルは以後の重巡洋艦の標準となった。当初発射管も装備していた

武装に大きな変化はないが航空機設備の関係で高角砲は艦橋煙突周辺へ移動した。主砲塔は新型の強化型へ変更されたが砲自体は変わっていない

## ボルティモア級 1943年～ (同型艦14隻)

条約明けの新型重巡洋艦として大量14隻建造されて全艦竣工している。後期計画の10隻は改良型オレゴンシティ級として建造された。ウィチタの実績を元にした大型化した船体は、14,400トンを超えるものであった。船型はブルックリン級で確立した形状・配置をベースとした。余裕のある船体は対空火器の大量装備にうってつけであった

主砲はウィチタで先行採用された新型の砲と重装甲の砲塔を搭載した。高角砲は全て5インチ連装両用砲を搭載したが初めて中心線上へ配置された

船体はアメリカ艦では珍しい顕著なシアが付いた低いフラッシュデッカーで僅かなタンブルホームが特徴。艦首のベルマウス付近が盛り上がっているのも特徴の一つ

## ノーザンプトン級 1930年～（同型艦6隻）

ノーザンプトン級はペンサコラ級の改良型として建造された第2グループ。船体形状は大幅に変更され乾舷の高い船首楼型とされ、後期の3隻は旗艦スペース確保の為船首楼を第一煙突基部まで延長している。兵装はペンサコラ級と同等の能力を有し、格納庫を設置した航空機運用設備はより充実したものとなった

船体は高い乾舷の船首楼タイプで、機関のシフト配置採用で生じた広い両煙突間は航空機設備に利用されたが配置的には理想的ではなかった

武装と装備品及び構造物はノーザンプトン級と同等であるが、拡大型である為配置に余裕がある。射撃指揮系統は2系統で武装は前後独立して指揮が可能

準主力艦として巡洋戦艦へと発展した装甲巡洋艦とは別系統の発達を遂げたのが条約型巡洋艦である。ワシントン・ロンドン軍縮条約の厳しい制限の中、改良を重ね建造された6クラス27隻は、第二次大戦を戦い抜き、日本海軍との激戦で8隻が戦没している。

条約型第1グループである1925年計画のペンサコラ級2隻は、他の条約批准諸国が排水量を制限一杯の1万トンとしたのに対し9千トンとされた。船体形状はシアが顕著な低いフラッシュデッカーで、緩やかなタンブルホームが特徴であった。主砲は8インチ連装・3連装各1基を艦前後に背負式配置した独特なもので、5インチ高角砲及び21インチ発射管を有する重武装艦であった。ただ、防御は強力ではなくボイラーとタービンを分離したシフト配置を初めて採用して抗潜性を向上させていた。広い両煙突間には2基のカタバルトと1基のクレーンが装備され4機の水偵が搭載された。

第2グループであるノーザンプトン級は1927年計画で6隻建造された。前級とはサイズは同等であるが大きく設計変更をし、比較的乾舷の高い船首楼型を採用した。主砲は前級が採用した3連装砲塔3基9門とし、以後の重巡洋艦の標準的な配置となった。広い両煙突間は水偵運用スペースとし後部煙突前に格納庫を設けた。なお、後期3隻は旗艦設備設置の為、船首楼が前部煙突まで延長された。

第3グループであるポートランド級は1929年計画で2隻建造された。前級の拡大改良型で初めて排水量が1万トンを超えたクラスである。シルエットは前級と酷似しているが、艦橋は大型化したもののマスト類は低くされた。兵装では本級から発射管を廃止した代わりに高角砲を4基から8基へ倍増した他、射撃指揮装置類も増強された。2番艦は旗艦設備を持つ長船首楼型となっている。

第4グループであるニューオーリンズ級は1929年計画で3隻、1930、1933年計画で各2隻建造された。

## ニューオーリンズ級 1934年～（同型艦7隻）

条約型重巡洋艦最多の第4グループ。艦型は艦尾がローシルエットの長船首楼型へ変更された。6、7番艦は重量削減の為艦橋及びシェルターデッキが縮小されている。航空機運用に有利なスペース配置の為機関のシフト配置は見送られたが、その為が大戦前半に3隻の戦没艦を出している。大戦末期には近代改装で艦橋は塔型に改正され艦容は一変した

船体は基本形の変更に加え艦首付近の膨らみもなくなったシンプルなものとなった。前後マストも三脚を廃止し単柱化によって軽量化を図っている

## セントルイス級軽巡洋艦

ブルックリン級8.9番艦の呼称であるが、高角砲を初めて5インチ連装両用砲とした改良版であった。ブルックリン級自体は巡洋艦の船体形状及び配置を確立標準化したクラスであり、ウィチタの設計に影響を及ぼしている

船体は乾舷の高いフラッシュデッカーであるが、アトランタ級でも採用された甲板のエッチを丸めて応力の分散が図られた。艦尾配置の航空機設備は理想的であった

前級までとは大幅に設計変更がなされ、船首楼が艦の後半部まで延長され艦尾部が低い乾舷の特異な長船首楼型とされた。大幅に変更された上部構造物は艦橋直後に2本の煙突を立て、その後方を水偵運用スペース及び格納庫とされた。その為機関のシフト配置は見送られた。主砲塔は形状が変更され装甲を強化したが基本構造には変わりが無い。また、高角砲の配置が後部煙突周辺から艦橋・煙突周りへと移された。尚、1933年計画の2艦は重量軽減の為、艦橋及び艦橋前のシェルターデッキの縮小などの変更がなされた。

第5グループであるブルックリン級はロンドン条約の制限下で建造された6インチ砲搭載の軽巡洋艦である。1933年計画で4隻、1934年計画で3隻、1935年計画では一部改良型2隻が建造された。排水量は制限一杯の1万トンで、船体は乾舷の高いフラッシュデッカーとされた。主砲は元々6インチ3連装を前後各2基であったが、最上型に対抗すべく艦橋前に1基増備した形に設計変更をした。射撃指揮系統を前後2系統としたのも同級からの特徴となっている。また、航空関連の設備は艦尾に移され、メインデッキ下にスライド天蓋式格納庫を設置しその両舷配置のカタバルト及び艦尾部のクレーン装備により艦尾形状はトランサムスターンとなった。この船体形状は以後の巡洋艦の標準となった。1935年計画の2艦は初めて5インチ連装両用砲を搭載し上構の配置も異なることからセントルイス級とも呼ばれている。

条約型巡洋艦の最終艦であるウィチタは1934年に1隻建造された。元々ニューオーリンズ級8番艦として計画されたと言われているが、1933年計画のブルックリン級の設計を取り入れた新型重巡洋艦として建造された。船体形状や上構配置などはブルックリン級に準じており、条約明けの新型重巡洋艦の試作的要素の高いものであった。主砲はボルティモア級に先立ち新型の砲を採用し、高角砲は5インチ両用砲を採用している。

条約明けの重巡洋艦であるボルティモア級は1940年計画で8隻、1942年計画で6隻が建造されたが終戦までに11隻、終戦直後に3隻の全艦竣工している。艦型はブルックリン級で標準化した乾舷の高いフラッシュデッカーでトランサムスターンというもので、排水量1万4400トンを超える大型艦となった。上構配置はウィチタに準じているが、艦橋構造物は大型となり機関はシフト配置を採用して抗潜性を高め防御はウィチタに準じた構造を備えた。兵装はウィチタをベースに対空火器が大幅に増強され高角砲は全て連装両用砲とされた。

## 重巡洋艦ウィチタ

元々ニューオーリンズ級8番艦であったと言われているが条約明けの新型重巡洋艦を見据えた試作要素の高い設計がなされた1隻である。標準化したブルックリン級の船体を設計に取り入れ、新しい主砲塔や5インチ両用砲の採用など、1万トンの船体に対して充実した装備はボルティモア級のプロトタイプとしての実績は充分なものであった

# 条約型巡洋艦の航空兵装

主力艦隊の目として重視された航空偵察力

偵察は巡洋艦の主要な任務のひとつだ。水上機が実用化されたのちは、日米英の三国はカタパルトや揚収用のクレーン、艦載機用の格納庫などを設置し、水上機運用能力を持った。ここでは三国の航空兵装の装備方法の違いなどを見てみよう

戦艦同士の艦隊決戦において事前に敵艦隊の動向を探ることは勝敗に大きな影響を与える。古くから航洋力のある中小型艦には偵察という任務が割り当てられていた。速力が早く小回りの効く艦が敵を偵察し、その進路や速力などの情報を味方艦隊に伝達する。そのための艦として巡洋艦が使われることも多かった。イギリス海軍では小型巡洋艦として偵察巡洋艦 (Scout cruiser) という艦種が建造されたこともあった。

第一次大戦後半に実用化された航空機は当初より偵察任務についており、大戦末期には水上艦に搭載できるようになっていった。軍縮条約時代の条約型巡洋艦はごく初期の建造艦を除いて航空機運用能力を持った艦が多く存在した。各国の航空兵装事情を見てみよう。

## ■日本

日本海軍では妙高型巡洋艦からスタートするがその前のクラス、古鷹型、青葉型でも実験的な航空兵装が搭載されていた。古鷹型、青葉型に搭載されたのはドイツが開発したハインケル式滑走台という設備だった。これはすべり台のような構造で滑走台後端に置かれた艦載機がその上を滑走して発艦するというものだった。せっかくの海外製の装備だったが実用性に乏しくすぐに廃止され、カタパルト (射出機) に取って代わられることとなった。青葉型の「衣笠」に最初に搭載されたカタパルトは圧縮空気で射出するものだったが、すぐに火薬式のものが開発され、それがのちの条約型巡洋艦のカタパルトの主流となっていく。搭載する艦載機も第二次大戦が近づくにつれて大きく重くなっていったため、カタパルトもそれに対応する大型のものが開発され換装されていった。

日本海軍の航空兵装で特徴的なのは基本的に格納庫を持たなかった点だ。艦載機は壊れやすい、非常にデリケートな装備であるため、戦闘時以外は米英のように格納庫に保管しておきたかったが、そのようなスペースもなく露天駐機されていた。このため砲戦時にはその爆風によって艦載機が破損してしまうケースも見られた。

日本海軍巡洋艦の艦載機は索敵用の三座機

(九四式水上偵察機や零式水上偵察機) と弾着観測・魚雷戦観測用の二座機 (九五式水上偵察機や零式観測機) が用意されておりそれらを混載して戦闘に赴いた。

## ■米国

アメリカ海軍の条約型巡洋艦は初期のころから航空機索敵能力を重視していた。最初に建造されたペンサコラ級は艦型を小さく収めるためにカタパルトを搭載するだけで格納庫を設けなかったが、それに続くノーザンプトン級以降は艦載機用の格納庫が設置されており、搭載機はすべて格納することができた。カタパルトなどの航空兵装はニューオーリンズ級までは船体の中央部、艦橋後ろのスペースが充てられていたがブルックリン級以降の艦では艦尾にカタパルト、クレーン、格納庫が集約されることになった。艦尾部分は主砲の爆風などの影響を受けることもなく、また被弾した場合でも航空機用のガソリンなどの可燃物が船体の主要部から遠いところに置かれるため航空兵装スペースとしては最適で、のちの大型水上艦 (戦艦、巡洋艦など) はすべてこれになった。ただ艦尾部分は波をかぶることも多かったため格納庫が水浸しになるなどの問題点もあったようだ。

## ■英国

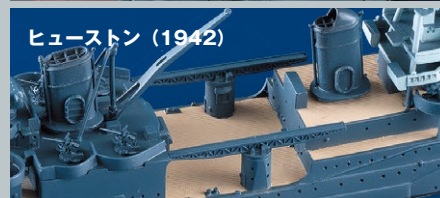
イギリス海軍は初期に建造されたケント級などは航空兵装を持たなかった。のちにその必要性を感じ、航空兵装を追加することになるが、そのスペースの捻出には苦勞している。格納庫などを設置するスペースは取れなかったため、艦載機は露天駐機でカタパルトも窮屈に設置されている。後期に建造された大型軽巡では航空兵装のレイアウトを一新し、艦橋下部のスペースを格納庫に充てて、その直後に舷側方向に打ち出すスタイルのカタパルトを固定して設置していた。この優れたレイアウトはキングジョージV世級戦艦などにも取り入れられている。大戦後期になるとレーダーの発達などにより艦載機を使用する機会も減ったため、航空機の搭載は取りやめてカタパルトをおろし、そのスペースは短艇置き場などとして使用されることになった。



加古 (1927)



羽黒 (1942)



ヒューストン (1942)



ウィチタ (1943)



エクセター (1942)



ロンドン (1941)

		全幅	全長	最大出力	最大速度	航続距離	武装	乗員
日本	九四式水上偵察機	14.00m	10.14m	600~780hp	239~276km/h	2200km	7.7mm機銃×3 爆弾30kg×4または60kg×2	3名
	九五式水上偵察機	10.98m	8.81m	630hp	299km/h	898km	7.7mm機銃×2 爆弾30kg×2	2名
	零式観測機	11.00m	9.50m	830hp	333~370km/h	1070km	7.7mm機銃×3 爆弾30~60kg×2	2名
	零式水上偵察機	14.50m	11.49m	1080hp	367~376km/h	3326km	7.7mm機銃×1 爆弾250kg×1または60kg×4	3名
アメリカ	カーチス SOC シーガル	10.98m	9.48m	550hp	266km/h	1086km	7.62mm機銃×2 爆弾295kg×1	2名
	ヴォート OS2U キングフィッシャー	10.95m	10.31m	450hp	275km/h	1300km	7.62mm機銃×4 爆弾146kg×2または45kg×2	3名
イギリス	フェアリー シーフォックス	12.2m	10.82m	395hp	200km/h	710km	7.7mm機銃×1	2名
	スーパーマリン ウォーラス	14.0m	10.2m	680hp	215km/h	965km	7.7mm機銃×2 爆弾345kg	3~4名

# アメリカ海軍条約型巡洋艦キットガイド

初期の条約型巡洋艦キットの充実が望まれる

外国艦のインジェクションプラスチックキットは歴史が古く、ヨーロッパなどでは自国艦を中心に統一スケールでシリーズ化していましたが、アメリカでは統一スケール物の開発には消極的でした。ここではウォーターラインシリーズ登場以降主流となった1/700スケールのアメリカ巡洋艦キットをクラス毎紹介します 解説/村田博章

アメリカ巡洋艦のインジェクションプラスチックキットは意外と少なく、ウォーターラインシリーズでは「インディアナポリス」のみでピットロード参入後も4タイプに限られます。近年は新興の中国メーカーによる新規開発が相次いでいます。

## ■ベンサコラ級

残念ながらインジェクションキットは存在しません。かつて3社程からレジンキャストキットが出ていましたが現在では入手困難です。どれも独特な艦型は上手く再現されていましたが、同級の持ち味は出し切れていませんでした。唯一入手困難なクラスですから新興メーカーには是非キットの開発をお願いしたい所です。

## ■ノーザンブトン級

こちらもインジェクションプラスチックキットは存在しません。これまで4社程からレジンキャストキットが出ましたが、現在はコルセアアルマダとニコモデルの2社入手可能です。ニコモデルは前期型「オーガスタ」のみで、コルセアアルマダは前期・後期型共に2艦ずつ出ています。いずれもプロポーシオンは良好ですが、船体のタンブルホームの角度や艦首部のボリュームが少し不足しています。後期型はコルセアアルマダでも最新の製品で上構の再現度がアップしており格納庫は開閉選択式です。

## ■ポートランド級

アメリカ巡洋艦キットのパイオニアとしてマッチボックス社（現ドイツレベル）の「インディアナポリス」があります。ウォーターラインシリーズより前のもので今の目では厳しい物ですが、1/700洋上モデル・船体左右割り・多色成型などを取り入れていました。新し目の所ではタミヤの「インディアナポリス」があります。素晴らしい再現度で1/700のスタンダードとなる物です。ただ、撃沈された最終時という仕様に賛否が分かれます。自分としては作例でも取り上げた第5艦隊旗艦仕様が一番かなと思います。「ポートランド」についてはニコモデルのレジンキャストキットが存在し現在も入手可能です。再現度も高く組み易いのですが反りが出やすいのが難点です。「インディアナポリス」からの改造もハードルが高いのでキット化が望まれます。

## ■ニューオリンズ級

インジェクションプラスチックキットはピットロ

ードから前期・後期型合わせて7タイプ出ています。概ね1942年後半の仕様となっており「サンフランシスコ」のみ改装後の1944年仕様があります。キットは各艦の差異を巧みに再現した意欲作です。レジンキャストキットはピットロードを含む4社ほどから発売されており、作例でも紹介したコンブリック社は2タイプあります。同社製品は原型が機械加工で作られたと思われる精度の高いもので、インジェクションキットの様に組み立てられる優れたものです。ただ紛争の影響でロシア製品の入手は難しくなっています。尚、ピットロードのレジンキャストキットはインジェクション化に伴い絶版となっています。

## ■ブルックリン級

こちらも大変人気の高いクラスでありながらインジェクションプラスチックキットには恵まれておりませんが、年内にはヴィーホビーから「ヘレナ」が発売される予定です。レジンキャストキットは5社ほど発売しており現在でもコルセアアルマダ、ニコモデルの2社は入手可能です。両社とも再現度は高く比較的組み易い内容です。ニコモデルでは後期型「セントルイス級」を含む5タイプ出ていますが大戦初期仕様がありません。「ヘレナ」に続いて前期型のインジェクションキット化も期待されます。

## ■ウィチタ

単艦というハンディはありインジェクションプラスチックキットは存在しません。レジンキャストキットも2社程出ていましたが現在は入手困難となっています。最近大戦末期仕様の3Dプリントキットが出たようです。詳細はよく分かりませんが、海外の通販サイトで購入が可能です。

## ■ボルチモア級

ピットロードからインジェクションプラスチックキット、レジンキャストキットの2タイプ出ています。艦尾形状の違い等を作り分けたりと良くリサーチされています。なお、レジンキャストキットはインジェクションプラスチックキットの発売にともない絶版となっています。

総括としては、条約型初期のクラスや人気の高い「ブルックリン級」のインジェクションプラスチックキットが出てませんから、新興メーカーによる開発、ないし価格のハンディはありますが3Dプリントキットの開発に期待を寄せています。

## ポートランド級重巡洋艦



アメリカ海軍重巡洋艦 インディアナポリス  
タミヤ1/700  
初版発売 2000年

## ニューオリンズ級重巡洋艦



アメリカ海軍重巡洋艦 ニューオリンズ  
ピットロード1/700  
初版発売 2008年



アメリカ海軍重巡洋艦 アストリア  
ピットロード1/700  
初版発売 2008年



アメリカ海軍重巡洋艦 クインシー  
ピットロード1/700  
初版発売 2009年



アメリカ海軍重巡洋艦 ミネアポリス  
ピットロード1/700  
初版発売 2017年



アメリカ海軍重巡洋艦 ヴィンセンス  
ピットロード1/700  
初版発売 2018年



アメリカ海軍重巡洋艦 サンフランシスコ  
ピットロード1/700  
初版発売 2009年

## ボルチモア級重巡洋艦



アメリカ海軍重巡洋艦 ボルチモア  
ピットロード1/700  
初版発売 2005年



アメリカ海軍重巡洋艦 ピッツバーグ  
ピットロード1/700  
初版発売 2005年

## その他のアメリカ海軍巡洋艦キット

これまで紹介した条約型の他にアメリカ海軍はたくさんの戦時型が存在しました。一応全タイプのキットが存在します。また、最終グループの一部が戦後指揮艦やミサイル巡洋艦として就役していますがそれが意外と揃います。ではインジェクションプラスチックキットから紹介します。アトランタ級は古くはピットロード（現ドラゴン）、最新でヴィーホビーから各2タイプ、クリーブランド級は古くはピットロード、最新ではヴィーホビーとベリファイアから発売されています。最新のものは表情も豊かで組み立ても容易ですが、ピットロードのものは時代を感じさせます。驚きはデモイン級がベリ

ファイアから、ウースター級がヴィーホビーから出たことで、以前では考えられない事でしょう。最後にアラスカ級はトランペッターから出ています。次にレジンキャストキットを紹介します。オマハ級はニコモデルとコルセアアルマダから、クリーブランド級の後継ファーク級はニコモデルから、ボルチモア級の後継レゴシティー級とウースター級はニコモデルとアドミラルティーモデルワークスから、デモイン級はコンブリックから、アラスカ級はサメックモデルなどからそれぞれ出ています。なお、レジンキャストキットについてはニコモデルとコルセアアルマダは現在でも入手可能です。

ISBN978-4-499-23414-6 C0076 ¥4500E

定価(本体4,500円+税)



9784499234146



1920076045004



# 巡洋艦三国史

模型で見る日米英の条約型巡洋艦  
Treaty Cruisers of Three Great Navies